

偏らざるをこれ中と謂い、易わらざるをこれ庸と謂う。中は  
天下の正道にして、庸は天下の定理なり。天の命ずるをこれ性と  
謂い、性に率うをこれ道と謂い、道を修むるをこれ教えと謂う。  
喜怒哀樂の未だ発せざる、これを中と謂う。発して皆節に中る、  
これを和と謂う。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。  
中和を致して、天地位し、万物育す。

【大体の意味内容】いづれにも偏ることがないのを「中」といい、萬世にわたって易わ  
らないことを「庸」という。一方に偏らずにバランスを保つ「中」は、天下の正しい道の  
徳である。永久不変なる「庸」は、天下における定めというべき根本原理である。宇宙  
の意思の顕れである天に命じられ、我々に備わっているものを「性」、すなわち生まれつ  
きという。賢しらな人々によって天性を歪めることなく、素直に自分の持ち前に従って生  
きるのを、「道」という。迷いの多い我々が見失いがちな道の徳を修めるよう、心眼を啓  
かせることが、「教え」というものである。感情に、「喜び」とか「怒り」とか、「哀しみ」  
とか「楽しみ」といった、区別が生じていない未分化な原態が、「中」である。「喜」「怒」  
「哀」「楽」に分化しても、それぞれが行きすぎたり暴走したりせずに節度を保つことを、  
「和」という。未分化な混沌である「中」は森羅万象の根本、すなわち天下の大本である。  
森羅万象を束ねバランスを維持する「和」は、無秩序な物事を小宇宙に到達させる道の  
作用である。一見真逆な状況に見える「中」・「和」を一致させることで、「天」と「地」  
の位相すなわち相互に作用しあう在り方も定まる。天の光や水が大地に生きる生命のエネ

ルギーとなり、地の発する水蒸気や大気が天を支える。こうして成り立つ万物化育の大循環を、「中和」という。

「中庸」というと、何か偏った立場・態度をとらないうことだから、「むっちゃんかす」「中途半端」でも同じ意味の言葉として捉えらるゝがちだが、かならず深い意味があることがわかる。赤ちゃんが泣いたり笑ったりするのは五感を通じての不快によるもので、「喜怒哀楽」の感情によるものではないといわれています。確かに赤ちゃん「怒りや悲しみの感情が湧いてくるのは考え

じです」と赤ん坊の様なメンタルが「中」であると考えておけばわかるはずです。

だんだんを経るに従って、自我が芽生え感情も細やかに分化し始めてゆへ。

その際、怒りに任せて破壊的な行動をとってしまったら、喜びのあまりハメを外し過ぎたり、悲しみに耐えかねて破滅的な振る舞いに陥ったりにしてしまうと、それは「庸」ではない、ということができます。

嬰兒のような未分化で原初的な情が活力を発揮する「中」と、細やかに多様に働く感情を、決して押し殺すのではなく、存分に喜んだり、激しく怒ったり、哀しみに身もたえしたり、楽しんで舞い上がったりのしつつも、そのいずれかによって破壊破滅には至らない「庸」とを渾然一体に実現するところが

「中庸」なのだと思解しました。